「所感」 鈴木商店と私

大幡久一

柳田さんに「たつみ」に何か書くようにと云はれながらそのままになっている。既に一九巻も出ているのに、まだ一度も書いていないので誠にすまないと思っている。今度第二〇巻にと言はれて「はい書きます」と言ってしまった。駟も舌に及ばずである。原稿用紙の前に坐っても筆不精の私に筆がなかなか動いてくれぬ。それで皆様には御迷惑かも知れないが鈴木商店と私として書かせて戴きます。

大正四年一つ橋の本科を卒業しました。同級生は皆な飛び立つように就職して行きましたが、私はもう少し勉強したかったので、専攻部に残り上田貞治郎先生のゼミナールで「商工経営」を学びました。卒論には呉服屋の倅だったためだろうか「生糸企業論」を書いて卒業資格はとれたものの、どうも勉強したようには思えず遊んで過したようだったが同人塾でよい友達を沢山得られ、川村善益先生の御薫陶をそれだけ長く受けられたのが幸いであった。

大正五年の十月頃採用試験のため東京支店に行った。通されたのは応接室だったように思う。大分待たされたが、やがて余り風采のあがらぬ老人が現われた。坪野平太郎校長からの紹介状を差し出すと神戸市長をしておられたからよく御存知であって先生の消息など尋ねられたが、とても穏やかな話し振りであった。質問は三つ。いとも簡単なものばかりで今でもはっきり覚えております。最後の問いに対し、はい、どこにでも行きますと答えると、それは誠に結構と言はれ、そんなことで採用が決りました。それが柳田さんの父君であったのだ。

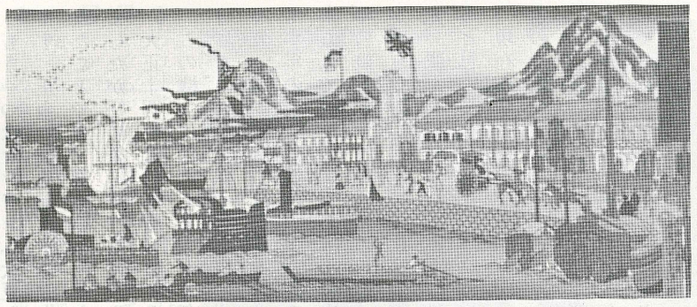
張りつめていた気も一気にぬけて一時ぼんやりしてしまったものでした。

学制の改正で卒業が半年繰上って三月になったのに卒業式にも出ないで相生町の本店に出頭したのが、大正六年三月二十六日のことであった。早速勤務場所が決められたが輸出部積出係であった。見習期間に小野浜に落花生の看貫にやらされたり、粘土版でコッピーをとらされたり、インボイスを打たされたり、為替手形を書かされたりしたが、三ヶ月位たって「チェッカー」になったように思う。その仕事は為替取組みのため、インボイス、為替手形、船荷証券及び保険証書が完全に揃って居って間違いがないかを確かめることであった。それから半年位たって池上基一さんに代って「スペーサー」になった。これは船会社に行って船腹をとってくる仕事であった。重量何噸容積何噸と言う工合に。当時定期船と臨時船との運賃は一〇倍から二〇倍という開きがあったから、定期船のスペース割当の増加のため必死の努力を払ったものだった。またスペーサーにはこのとって来た船腹に樟脳をつむか薄荷をつむか青豌豆か落花生か、何を積むかを決めねばならぬことと、本船に行って積荷の監督をもやらねばならぬ役目を兼ねていた。

その当時はとても忙しくて事務所に椅子を並べて寝た日が幾日も続いたものであった。それでも我々は適当に外に出て栄養を補給して来たものだから続いたが、ボンサン達にはそうも出来ず健康をそこねたものが出たのも無理からぬことであった。

会計部長の日野さんが毎日のように来られ、今日はどれ程入るかと催促されていた。ああした人柄の方だったから我々も一生懸命であった。時間後、正金銀行の裏口から入って書類を受取って貰ったことが数えられぬ位あった。一つ橋で同級の松本一雄さんがいたからである。

本当によくして貰ったもので今でも感謝している次第です。ロンドンに渡って用済になって帰って来た手形に一枚サインの落ちていたものがあって改めて西川さんのサインを取ったことを思い出します。これは私のチェックもれであり、銀行も素通りしたものでしょうが、あの時代五百磅で区切られ一万磅なれば二〇枚になり、それもトリプリケートまで作らされたものだから、一度に何千枚もの手



摂州神戸「西洋館大湊の賑い」小信画

形が出されたものでサイン洩れがよく一枚でとまったものと不思議に思います。

大正七年八月十三日京城支店で沢村さんにお目にかかっていると本店焼打の電話が入って本当に驚いたものだ。すぐ本店に伺を立てると帰るに及ばずとの返事が来たので、予定の通り大連、天津、青島及び上海を見学して一ヶ月振りで帰神しました。其時本店は海岸通一〇番地に移っていました。その頃植物油脂論を書こうかと思って文献を蒐めていましたが、全部焼けてがっかりしていましたら、住田正一さんが元気づけてくれ、惜しいから続けろと度々言ってくれましたが、とうとう止めてしまいました。

あとで住田さんは海運について立派な本を出されました。あの時自分と同じく原稿や文献を全部灰塵にしたのにと、その根気・努力に対し心から頭が下りました。

シヤトル詰の勝屋さんが暫く帰国するので、その間の手伝いにとその年の十一月末秩父丸にて同地に向いました。天気が悪く、しけつづきでバンクーバーについても船酔で上陸出来ませんでした。シヤトルについた日は休戦協定が成立したとかで石油罐を引張り廻し大変な騒ぎでありました。当時シヤトルの店は満州や日本から大豆油の輸入で大忙しであった。

三井物産支店長石田礼助さん（後の国鉄総裁）の大買占によったものである。そこで、落合豊一さん木村謙三さんからいろ〳〵教えていただいたものである。

その時分ワシントンでは禁酒だったが、時々銀行に「金銀塊（ブリョン）」が送られて来て、こっそり一杯やることが出来たことを思い出します。

勝屋さんの帰米も近づいて米国一周の旅に出て、紐育で北浜さん柏さん、桑港で中さんなどに会い面白い話、為めになる話をきいて一年半足らずの滞米を終えて帰神しました。永井さんは副支配人兼米油部長でした。川口一郎さんは米の方を担当され、私は植油の方の担当となりました。仕事の上で別段変った記憶がありませんが、ロンドンの高畑さんと永井さんが電信で大に論争されていたように思いますが、併し事件は何であったかとんと思い出せませんのが残念であります。

大正十一年の暮、大連勤務になりました。妙にいつも年末に動くようです。支店長は平高寅太郎さん、輸出部長は沢本嘉春さんであった。私は其あとを継いで部長となり大連油房の主任も兼務となりました。仕事は豊年製油への大豆の買付、欧米輸出用大豆油の買付を主とし、内地への豆粕輸出もやりました。

特別のこととしては張作霖への小銃二万挺の売込みの使者として、台湾生れの揚さんを通訳として引つれ奉天に乗り込んだことです。奉天駅まで出迎の馬車が来ており、城門を入る時、兵隊が一勢に捧げ銃をしてくれた。張作霖は出て来ませんでしたが、奉天省長の張之洞さん他数人と会いました。通訳氏は威厳に押されて充分話しが出来ず困った程でしたが、昼には省長の私邸で大変な御馳走が出たり、日本でも稀に見る美人を侍らしてくれたりの大歓迎でした。然し本店から陸軍の反対が強いから、この話はやめにしろと連絡して来ましたので、これで一巻の終りとなりました。

次は吉田秀太郎さんのロンドンの思い出にありました大豆油の大量バルク輸送について大連で苦力（クーリー）を大量使役し化学的清掃を加えて船艙の完全な掃除を行ったと、いとも簡単に書いてありましたが現場は大変で、やって見たものでないとその困難は解りません。先づ海水で洗うが勿論重油だからそれだけでは駄目、次に苛性曹達で洗

う。苛性曹達には蛋白質は弱いから人体には特別の注意が必要である。こうして洗っても滓がこびりついている。これをスクレーパーでごし〳〵削りとるのである。平たんなところはそれでよいが、パイプなどの入り込んだところは先の尖ったものやら曲ったものなど三、四種類の道具をつくってそこの滓をおとしたものだが、これには往生させられた。これが終ると「コーティング」といって豆粕でこすりつける。すると豆油の膜が出来るのですがパイプなどの隙間はどうすることも出来ないので閉口したものです。ロイド・サーベーヤーは私まかせで私がよいと言えばレポートは直ぐ書いてくれましたが、ロンドンから結果良好の電報のくるまでは心配でした。

もう一つはロンドンへ大豆七千噸満船のコンサイメントしたことです。正金の副支配人中島愛作さんが、私に個人保証をしろと言はれたことです。勿論取られるもののない身体ですから進んで引受けましたが好結果に終って矢張り胸をなでおろしました。

大正十四年五月本店にもどり年末に帝人に入社しました。

この機会に付加えますが本年は辰巳会の創立十五年目を迎えることになります。気の早い方は十五周年だから何か盛大な記念事業をやれとおっしゃっておられます。幹事に於てもいろ〳〵智恵を絞って本年の大会は五月中旬京都の大河内山荘で盛大にやろうと昨秋幹事五人で視て来ました。小倉山の南面六千坪に大河内伝次郎が三〇年の歳月をかけ丹精こめて造った庭園で、数多くの松・楓・桜などが興をそえ、遠くには比叡の霊峰、また双が丘につらなる洛西の風光、眼下には保津川の清流が眺められ一日の行楽に尤も適したところと思いました。

現在の会員は本会員約五四〇名、準会員約四六〇名、合計約一千名の大世帯でありまして、正会員の年令構成は九〇才以上八名、八〇才以上一二五名、この中に米寿以上の方一三名おられます。七〇才以上三一〇名、残り六〇才台、平均年令は七七才、喜寿となりまして御健康で長寿を重ねられんことをお祈りします。

外国電信部の思い出（三）

――今は亡き人々の面影――

廣岡一男

前号では「今は亡き人々の面影」として、先づ、主任の**木村喜之助**さんと先輩の**竜隆直**さんの事を書いたが、本号では若くして物故した柴田巌君など同輩五君の面影を偲んで私なりの思い出を書いてみたいと思う。

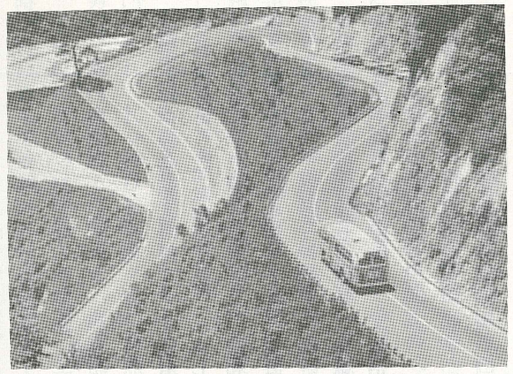
柴田　巌（敬称略、以下同断）

大正七年の長崎高商出身で、私より一年先輩であったが、全く同輩としてつき合ってくれた。四角い赤ら顔に眼鏡を掛けていた。頭を角刈りにしていたので、一層四角い顔に見えた。

九州男児らしい熱血漢で、何かの問題で口論になり白熱してくると、赤ら顔を一層赤くして興奮した。時々口喧嘩もしたが、私とは馬が合うというのか、「俺」「お前」の仲となり、新開地辺りをよくブラついたり、玉を突いたりした。元町の写真屋で一緒に写真をとったことなどもあった。

夏になると、ピカピカ光るアルパカの服を着ていたのも、何故か強く印象に残っている。

神戸で別れてから暫くして彼はスラバヤに転勤になったが、その赴任の途次、その頃下関在勤の私を訪ねてくれ、別れの杯を交わした。そして誘われるまま彼の郷里（福岡県遠賀川の下流の芦屋町）に同行し、婚約者にも紹介されたりしたが、それが彼と最後の別れになろうとは夢にも思わなかった。あんなに頑丈な体をしていたのに……。



▲ 表六甲有料道路のヘヤピンカーブ

上田良治

長崎高商中退。小柄な体と色白の顔の持主で、温和そうに見えるが、気の強い一面もあった。外電部初代主任（当時は外国通信係主任といった）上田貢太郎氏の息子であるが、その事を上田君は一度も口にしたことはなかった。

われわれの英語は、読み書きには相当自信を持っていたが、喋べる方は皆苦手である。ところが、上田君はスピーキングが得意中の得意であった。発音も垢抜けており、彼に比肩し得るものは一人も居なかった。

陽春の一日、外電部全員で京都へ遊覧に行ったことがあったが、その時の事である。予定の観光も終った夕刻、場所は覚えていないが、土産物等も売っている或る食堂で休憩し、ビールなど一杯やりながら皆で談笑していたところ、突然上田君が凄い勢で立ちあがり、隣席のグループの連中と喧嘩を始めた。驚いた私達は直ぐ止めにはいったが、仲々やめようとせず、顔面蒼白となって熱り立つ彼はこう絶叫した。"I'll fight to the end!"

あの時の事は、五十余年を経た今でもよく記憶しているし、特に、英語で叫んだ彼の悲壮な声はハッキリと私の耳底に残っている。

井上与之助

大正九年神戸高商出身。上田君と同じ位の小柄であった。眉が稍々八の字型で、笑うと恵比須顔になり、とても愛嬌があった。

井上君は兵庫県立龍野中学校の出身であるが、私は三年生の春まで姫路中学にいたので、四里ばかり離れていた龍野中学へも遠足か何かで一度行ったことがあった。それだけの事であるが同郷の親近感が湧き、時折り播州平野の事など彼れ此れ話し合ったものであった。

後年、私が東京に移り住むようになってからも、所用で上京した井上君が何度か訪ねてくれ、お互の無事を喜び合ったことがあった。友情に厚い好漢であった。

山岡　昇

大正九年の関西学院出、田宮正遠君と同期生。頭は中学生みたいな丸刈りで、中肉中背、歩くとき稍々内股であった。どうかすると少し吃る癖があった。身なりを構わない方で、ヨレヨレのネクタイをして平気であった。真面目で明るく柔和な性質で、皆からも親しまれた。

彼はビリヤードが上手であった。山岡・田宮・柴田の三君と私は玉突の仲間であった。一日の仕事が終ると、よく連れだって彼方此方の玉突屋に行ったものであるが、山岡が飛び抜けてうまかった。持ち点は田宮と私が四〇、柴田が三〇なのに対し、山岡は八〇であった。難かしい玉でも器用にこなして勝ち、私たちを口惜しがらせたものであった。悠々とキューをしごいている彼の姿が思い出される。

其後勤めていた竹中工務店を退社してからは、大阪の豊中で自適の余生を楽しんでいた。晩年には独得の字でよく便りをくれたが、遂に一度も逢う機会を得なかったのは、実に心残りである。

日野俊夫

大正九年神戸高商出身。寡黙な質（たち）で、仕事のこと以外では殆んど口を利かず、終日黙々として働いていた。実に真面目で勤勉であった。

われわれにも馴染み深かった会計の日野さんの息子で、その容貌もよく似ていた。五尺六寸、十八貫位の堂々たる体軀であった。